

『Die Hals-Nasen-Ohren-Krankheiten im Kindesalter』

von Priv.-Doz. Dr. P. Biesalski
(Univ. -Hals-Nasen-Ohren-Klinik Mainz)

日本医科大学教授 大 藤 敏 三

著者はドイツ、マインツ大学耳鼻咽喉科教室講師の職にあるビーザルスキー氏で小児の耳鼻咽喉科学書で小児特有の音声言語障害についてはチューリヒ大学の Luchsinger 教授の共同執筆である。

小児の耳鼻咽喉科学書としては極めて稀で日本でも小児科学全書中に東北大学の立木豊教授の執筆があり小生も之を読んだので対比が出来る。ドイツでは戦前の本で Göppert の単行本があつた。又音声言語障害についてはパウンドレルの小児科疾患全書の中でナドレッシニが執筆している。此の小児音声言語障害もよく書けてあつて小生も小児の疾患として屢々遭遇する、吃音、呐音症について教えられた事があつた。

扱て本著書は、充分実際の立場で小児に於ける耳鼻咽喉科疾病に就いて集録を行つている点では賞賛す可き著書であろう。小児は大人の小さい身体器官というものでなく、全く質に於て独自の生理と解剖との基盤の上に立つている事は耳鼻咽喉科の方面に於ても全く同じである。従つて、小児疾患をのみ対象として書き集められた本著の価値もその自身の価値を有していると概論する事が出来る。340頁で一応小児の耳鼻咽喉科領域の疾患の概略的記述が要を得ていると言わざるを得ないだろう。

上気道疾患は解剖から始めて鼻

腔、副鼻腔、喉頭気管に亘り、畸形、腫瘍、上気道の異物と教科書的に順を追って書かれている。異物は小児特有の疾患であるから、もう少し詳述されてもよい様に吾々日本の耳鼻科専門医は思うが7頁を之に当ている。気管支鏡の部位も短くまとめて3頁、之ももう少し詳述されて欲しいと思つた。此の点では日本の小児気管支鏡の方が内容がある段階に達している様に思う。然し教科書としては此の位のものかも知れない。Prämedikation も薬名が日本のものと違うので一寸ピンと来ない。巻末に著名と会社名が出ている。扱て小児副鼻腔炎の記述の所だが、之も極めて概説的に集約されて、極端な例を挙げである。特に慢性炎症の所には Sinobronchitis の項目が2頁に亘つて記されて相当詳しい。やはり、こういう小児疾患病名を独立させてる事に注目させられる。副鼻腔炎の Herdinfektion については診断は困難であるが著者は Siebbeinzelnen の latente Form の炎症を中耳炎の場合と同じ様に看ている点は注目させられた。文献は各章毎にまとめて新しいもの許りが集録されてある。小児特有の咽頭、扁桃炎の記述は相当に長く丁寧に整理され24頁を充当している。此処の記述等は一応教授用としても役立つ。その他、口腔の部は口蓋破裂の一般敘述、口

内炎、耳下腺炎等、一通りについて数頁を之に与えている。歯芽疾患、頸部疾患、淋巴腺炎、甲状腺と要領良く記し、胸腺にも一寸触れる事を忘れない。以上140頁。耳疾患には、聴力改善手術の項目も加えて約100頁、幼児の聴力検査法には Spiel audiometrie の写真が載せてある Peep-Show-Verfahren, psychogalvanische Methode, Sprachaudiometrie 等を並列して記述されその聴力像が出ている。難聴児童の項目は14頁が充てられ、かなり詳しい様である。手術はアトレヂイの手術、鼓膜穿孔の手術等の適応をあげる程度に止まつている。

細菌感染症として各病菌名の下に疾病が記述されウイルスも此処に入る。小児の音声、言語障害にはリュクシング教授が執筆して26頁、特に変つた内容はないが、簡明で小児の言語障害を理解する点では良書である。吃音もパウンドレル全書よりは最近の学説に触れている。

巻末には、鑑別診断の項目が22頁 Tabellenartig にして、項目だけを挙げているので備忘録用にも、教授用にも便宜であろう。クルズスや臨床講義用に参考書として使用すればその価値は充分あろうと、敢えて推薦する次第である。

Georg Tieme 342頁 1960
医学書院洋書部扱い ¥ 4,900.